

F 7 女子短大生の短大家政科に対する意識について(オノ報)
その1 本学年業生の追跡調査
大妻女大家政 ○飯田朝子 大竹智恵子 小笠原ゆ里

目的 本学では多様化している短大家政科の将来的展望に立って、昭和57年度入学生から、家政科を従来の被服、食物専攻に変えて、A～Fコース(一般家政、被服、食物、住居、保育、教職コース)の6つに分化した。この時にあたり、本学短大家政科教育に対する意識については、すでに調査し、昭和59年11月、日本家政学会関東支部会で報告した。

本研究その1ではコース制を実施した新しいカリキュラムで短大家政科教育を受けた学生が①卒業後短大家政科教育をどのように認識し、評価したか。②入学時と卒業後に短大家政科教育についての意識に変化があったか。③卒業後はほぼ1年間企業等に就職し、それらを通して短大家政科をどのように認識するようになったか等について調査し、今後の短大家政科教育のあり方を検討するための資料とするものである。

方法 調査時期 1985年1月下旬～2月上旬、調査方法 郵送による質問紙法、調査対象 本学短大家政科A～Fコース卒業生(697名悉皆)回収率 42.46%

結果 本学短大家政科にコース制を実施したオノ回卒業生は、短大家政科教育は「生活を科学的にとらえることのできる能力を養うところである。」「家事技術を中心とした実際的教養を予えるところである。」と認識している。入学時には短大を単に「就職に有利」と考えていたが、卒業後は「中広い教養が身につくところである。」と意識に変化がみられた。また、短大の2年間で自由な時間が持てたために、友人もでき、人生観、生き方がつかめ、基礎的、一般的知識と同時に専門的知識が身についたと評価しているものが、多くみられた。